第7号 2001.1 発行
(年3回 4月・9月・1月発行)

心の季刊誌

もくれん

MOKULEN

自分さがしの旅（その6）

高照寺住職
もくれん誌主宰
密　祐快

パースからノーズマンという名の町にたどり着くまで、ヒッチハイクは割とうまく運んだ。車を乗り継ぐ度に、言葉の壁は確実にあったが「日本人的笑顔」と共に、同じ話をくりかえす。話す私はうんざりだが聞く相手は初めての事。遠いニッポンからやってきた青年の話。結構興味深そうに聞いてくれる。当時は簡単に誰もがオーストラリアには行けなかった時代。珍獣のように珍しかったのかもしれない。ノーズマンという町に着いたときにはすでに陽は落ちていて、街灯の少ない町を歩きながら寝場所をさがした。小さな町で、町外れまでくると廃棄された車が何台も放置されていた。その車が今夜のホテル。中でも最も程度の良いホテルを捜すが、どれもガラスは割れているやらドアが無いやらで悩んでしまう。それでも決めて後部座席に寝袋を広げる。「やたら砂でザラザラしているナァ」と思いながらしだいに夢の中に消えた。翌朝。カーテンの無いホテルは朝陽が眩しい。携帯していた固形燃料に火をつけホーローのコップで湯を沸かしインスタントコーヒーを作る。ビスケットを二～三枚かじり朝食終了。寝袋をたたみ、又歩き始める。新しい一日の始まりだ。しばらく歩くと町を抜け、そろそろヒッチハイクで旅している同年配のソバカス顔の白人の青年。

「ハーイ。おはよう。」声をかける。

「おはよう。」返事が返ってくる。

「どこからきたの?旅行?」

「イギリスから。ヒッチハイクで旅してるんだ。君は中国人?」

「日本人だよ。メルボルンに向かうところなんだ。ところで何時間ここで待っているんだい。」(まずまずこんな会話かな)

すると彼はこう言った。

「ア、ウイーク（一週間)。」

(一週間!ウソだろ。なんで一週間も待たなきゃいけないんや。冗談じゃないよ。)

たが、ヒッチハイクする者の決まりとして私は彼から遠く離れて車を待つしかない。

(冗談じゃないよ。一週間も待てるかァ）ぶつぶつ独り言を言いながら歩いていると、又別の旅行者が立っていた。一人じゃない五人もいる。

「ハーイ。おはよう。」

「おはよう。」

「何日車を待っているんだい?」

「ア、マンツ（一ヵ月)。」

「一ヵ月だと!（冗談はやめて!)。」

その話に自分の耳を疑ったが、聞けば彼等は全員オーストラリア人で、お金がなくなるとこの町でアルバイトをしながら乗せてくれる車を待っているのだという。そのとんでもない話を最初信じていなかったが、その後その理由を思い知らされることになろうとはその時は知る由もなかった。(大変な事になった)

仕方なく私はまたもや彼等から遠く離れた場所まで歩いていくしかなかった。

(なんだか知らないが今日はついてないなァ。こんなことじゃいつ車に乗せてもらえるのだ?…)

その日、一日中待って、なんと五台しか長距離トラックは通らなかったのだ。だが必ずしも乗せてくれるという保証は無い。運転手の厚意に頼っているのだから…。後で気付いたが、この町からは砂漠のようなナラバー平原が千キロも続いていて、その間は町らしい町もないから、長距離トラックは助手席に運転手の食料等を積む。他人など乗せる余裕などあるはずがないのだ。

ああ、それでも期待して何時間（何日）も待ち続けるのがヒッチハイク…。

その日は虚しく過ぎた。暗い道を私はトボトボと昨夜の廃車ホテルに戻るしかなかった。

筆者が昭和四十八年から三年間、世界各地を放浪した時の話である。

「十七才の苦悩」

密　祐快

十日前、突然大阪の画廊のオーナーから電話が入った。

「お久しぶりです。お元気ですか。」

お互いに挨拶を交わし、近況を述べあった後、恐縮しながらも事情を話し始めた。

「実は私の甥（おい）の事なんですが。いい子でガンバリ屋さんなんだけど、高校を［登校拒否］をおこしていて…家に閉じこもりきりになっているんです。そんなことしていてはよくないと思って…やりたいことをやればいいよって言うのですが、なんだかそれも見つからないみたいで…そしたら「坊さんになってみようかな」って言い出して、それで密さんに甥と話してもらえないかと思って…。」

「坊さんに…ですか。」

長い電話の最後になって、当寺にお越しになる日を十一月二十二日に設定したが、翌々日一週間伸ばしてほしいとの連絡があった。

☆　☆　☆

十一月二十九日午後一時――

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼

一台の車に乗って四人がやってきた。昼食がまだだというので近くの食堂を紹介し、二時になって四人がもどってきた。本堂隣りの部屋に通す。明るい金髪に染めた十七才君は黙っていて静かだ。

「坊さんになりたいんだって…。」

うつむきかげんで小さくうなずく。

「君の言う坊さんて、どんなイメージ?」

「夏目雅子の（さんぞうほおし）のような…。」

（そういえばあった、あった。昔のテレビ番組に。そうだったか。孫悟空の世界だ。）

「そうか。三蔵法師のような坊さんになりたいのかい。」十七才君、うなづく。

それほど詳しくないが玄奘三蔵の話をする。七世紀（千四百年前）の人の話だ。

十七才君は結構真剣に聞いてくれるので、その後、高野山での修行場の話を長々としてしまった。

☆　☆　☆

話ながらも、私の心の中は十七才君の［登校拒否］の事や彼の心の状態が気になっていた。（何が原因で登校しなくなったのだろうか。初めて出合ってすぐにそんな重大事項を単刀直入に質問するのも大人げないかな。）

実は昨年の秋、十二月から今年の春までの間、過去五年間登校拒否をやっていた女子高校生を週末の前後、お寺で預かったことがあった。登校拒否をやっていた生徒ばかりを集めた学園の寮にいたが、彼女は長崎市の出身で、週末は帰宅せよという校則の為、冬季は大変だろうと思い、仏縁として泊めてあげたのだ。その時期、本人からも教師からも［登校拒否］の実態と、本人が社会との関係を元にもどすことの難しさも聞いた。また、特効薬の無いことも聞いていた。彼女は春に卒業して長崎に帰って行ったが、先日初めて連絡があった。文面には将来の「夢」が書かれていた。

☆　☆　☆

さて今日の十七才君。

「君は［般若心経］ってお経知ってるかい。」そう尋ねると、うなづきながら「名前だけは…。」と答える。

「般若心経は君の知っていた三蔵法師の漢訳が現在一般的に使われてるんだよ。今日はその講義をしてあげようか。」

突然の申し出に私を見上げて見る目がキラッとした。

（ちょうど二週間前にもある会で講義したところだ。）

はっきり言えば内容は難

耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至
無意識界無無明亦無無明盡乃至無老
亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故

しい。だがチョット期待もあったのだ。なぜなら心経を理解するためには何よりも直感で理解することが大切だからだ。若い彼なら何かを感じてくれるかもしれない。そう思った。

資料のプリントを全員に配り、極力、学問的に説明することにした。心暖まる心経の話は他の本や講演で見聞きすればいい。できるだけ骨子から離れないスリムで解説的な話を始めた。ごまかしのない解説。

（1）観自在菩薩はね。六波羅蜜の修行をして五蘊（ごうん）は皆んな空（くう）だと覚ったんだよ。そして一切の苦しみや悩みを解決したんだ。六波羅蜜の修行というのはね。①布施②持戒③忍辱④精進⑤禅定⑥智慧のことで、それを真剣に生活の中で実践しつづけていると五蘊①色②受③想④行⑤識がみんな空（何もない）なのだ、と悟れたと言うわけだ。そしたらすべての苦しみが無くなった――。

「まだつづけて聞くかい？」

彼、うなづく。

それじゃ、「空（くう）」について話そう。心経は「空（くう）」の哲学だ。この世界のすべての物は我々の五官を通して入り、「モノ＝色」という観念や知識が生まれる。だが「モノ」は刻々変化して一定ではない。もともとが実体の無い仮の姿。それゆえにそんな観念や知識の全部が仮のモノ。「人間」も同じ。モノが生まれてくるのは、「空（くう）」が流転している時に、ある原因（因）とある現象間の相関関係（縁）との作用・和合によって、結果として「モノ」が生まれるのだ。「空（くう）」とはモノの中に潜む実体、またそれを作り出す実体のこと。「エネルギーソノモノ＝いのち」とでも言うかな。「わかるかい？」十七才君うなづく。

この講義は延々一時間あまりもかかった。

☆　☆　☆

この講義の最中、十七才君の胸のうちを少し聞くことができた。モヤモヤとしたスッキリしないモノを心深く持っているようだった。だが、わずかな時間で彼の生き方を決めることは出来ない。ただ、「般若心経」を通して何かを感じてくれた事は確信した。すぐに結果は出なくとも、いつか、キッカケ（縁）というものがあればこそ結果が生まれる。

誰にも、「いのち」の事や「自分」の生き方などで悩み苦しむ年頃がある。その時には安易な論理や道徳だけを振りかざさず、その時をキッカケとして、しっかりとした「真理」を教えることが大切である。

今年は「十七才」が様々な事件を起こした年だった。

混沌とした時代であるがゆえ、

観（＝察知すること）自在（＝自由自在）菩薩（＝悟りを求める人）に彼等こそ成り得る人達だと心から思う。

ガンバレ！十七才達！

（参　考）

◎六波羅蜜（ろくはらみつ）

①布施（奉仕の精神）
②持戒（心身のあり方）
③忍辱（恥を忍び耐える）
④精進（努力）
⑤禅定（静かに考える）
⑥智慧（①～⑤によって得られるもの）

◎五蘊（ごうん）

①色（現象）
②受（感覚）
③想（意識）
④行（心の作用）
⑤識（判断）

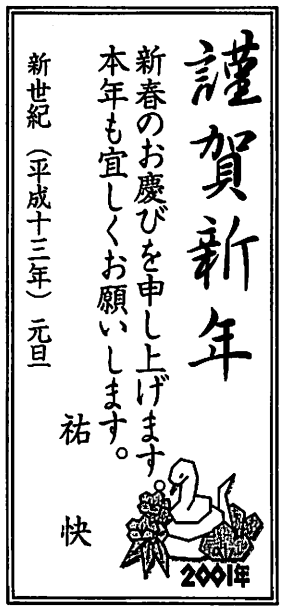
お便りコーナー

前略ごめんください
「もくれん」をお送りいただき、ほんとうにありがとうございました。
あわただしく過す日々、忘れかけていた大切なものに、ふと、気付かせてくださるのが、「もくれん」です。
ご住職さまの強さと温かさにふれさせていただけることに感謝いたします。
私も年を重ねることで、体力のおとろえが身にしみますが、まだ動ける間は、忙しくしていたいと思います。そして、人としての大切な心のありようを、ご住職さまの「もくれん」によって学び、よい年を重ねてゆきたいと思っています。　兵庫県大屋町　山内真知子

先日は、お便り頂いてありがとうございます。
「もくれん」読ませて頂きました。
お参りさせて頂いた時は、私自身がとても苦しんでいる時でしたので、法話を聞き、大きな声でお経を上げさせて頂いて、とても気持ち良く、帰る事が出来ました。
とても感謝して居ります。
野田川の妹に勧められて、なかなか行く時がなくて、やっとお参り出来ました。
毎年行かせて頂きます。
大阪市　新本紀世史・英子

前略
朝夕は、少ししのぎやすくなって参りました。
御住職様お変わりございませんか？
今年の夏は、本当にお暑うございました。
先日は、心の季刊紙〝もくれん〟をお送り下さいまして有難うございました。
いつも楽しみにしていましたので、すぐに拝読させて頂きました。
十三仏版画も今年で三枚集まりまして、来年四枚目を今から楽しみに、今年同様、四月になったらすぐに伺うつもりです。
西宮市　中森　俊子

前略
もくれん　第六号　ご送付いただきありがとうございます。
平らかな気持ちで文字を追うことができるような感銘を受け、静かな数日を送れたような気がしております。
御住職には、ご健康に留意され、ますます、多方面でのご活躍をお祈りします。
早々
堺市　赤木　二男



●御浄財、切手などの御寄付をいただいた皆さん

＊平成十二年九月一日～十二月六日分

赤木　二男（堺　市）　前田　妙子（芦屋市）
天野　松子（神戸市）　中森　俊子（西宮市）
井上　英子（相楽郡）　川口マス子（大阪市）
椿野　鈴子（朝来郡）　桐山　艶子（高槻市）
山本　一二（羽曳野市）　山内真知子（養父郡）
桐村　昭吾（福知山市）　中尾　郷美（門真市）
中島　要（朝来郡）　匿　名　女（八鹿町）
新本紀世史・英子（大阪市）　みき（略　名）
小林　清一（舞鶴市）　（敬称）

後記

十二月十一日は、夜になって初雪になった。翌朝には芝生の上や屋根には五センチほど積もった。境内の木々は落葉し寂しくなった中で唯一南天だけが赤い実をたわわにつけている。その上にうっすらと雪帽子が乗った。そこに山鳥がやってきて南天の実をついばむ。山寺ならではの風景だ。ところが今年の秋、「熊」が境内に出た。夜八時頃、工房に行くために街灯をつけたら柿の木から黒いお尻が降りてきた。熊だァ――。
私は慌てて工房に逃げた。冗談じゃないよ。熊だけはイヤだ。お参りに来て欲しくない。

「もくれん」誌ご愛読のもうしこみ

貴方様の①御名前②住所③職業④年齢⑤電話番号をハガキに記入していただいて御申し込み下さい。発行時に送付いたします。
会費・購読料の徴収はいたしません。読んでいただいて一時でも心が癒されて下されば嬉しく思います。もし、心に余裕ができて、少しでも援助してやろうと思われましたら、無理のない善意の浄財をお送りいただければ有り難く思います。

＊もくれん誌友の会＊
〒667－0043
兵庫県養父郡八鹿町高柳1156　高照寺内
TEL 0796－62－2865
FAX 0796－62－3130
振　替　01150－8－78975
加入者名・高　照　寺